

婚姻に至る経歴書

申請人 崔 華陽
作成者・夫 山田 潤二

1. 申請人（妻）の在留歴

申請人の崔華陽は私の妻です。

妻は、2003年11月 日、就学の在留資格で来日しました。札幌にある ×ランゲージスクールに入学し、在留期限は2004年5月 日でしたが、その期限を過ぎても日本に滞在していました。在留期限後は、2004年6月 ×日まで東京の親せきの家で生活し、同年7月×日からは栃木県小山市所在の焼肉店で2年間働きました。2006年6月 ×日からは、東京都港区浜松町所在の韓国家庭料理店で9か月働きました。その後、2007年4月 日から2008年1月××日までは栃木県足利市所在の焼肉店「マ ×」で働いていました。私が妻に出会ったのは、この時期のことです。

2. 私（夫）の職業など

私は、従前、信用組合に勤務していましたが、住宅ローン推進における得意先であった現勤務先の前身である新日本 ×株式会社に魅力を感じ、2004年12月 ×日に同社に入社しました。同社の合併に伴い2006年に現在の商号であるABC不動産株式会社（資本金××万円・従業員数××名・戸建分譲事業・注文住宅事業・分譲マンション事業・不動産賃貸事業・総合不動産流通事業）に社名変更をしました。現在私は同社の「BCD伊勢崎店」に主任営業兼宅地建物取引主任者として所属しております。主に、群馬・栃木・埼玉を商圏とした住宅販売や土地販売及び仲介を中心とした仕事を行っています。入社から2009年8月 ×日まで、埼玉県深谷市の支店に勤務していましたが、2009年9月×日から群馬県伊勢崎市の支店に異動となり現在に至っております。

3. 妻との出会い

現在、私の会社は主に群馬・栃木・埼玉で営業展開を行っております。しかし、2006年までは栃木県に支店はありませんでした。そこで当時の販売エリア拡大のため栃木県への出店を徐々に進める計画となりました。私は、2007年4月×日から同県足利市で物件を探す担当の1人として任命されました。同時にお客様から足利での土地紹介及び調査依頼も受けていたので、

2007年5月下旬ころまで仕事で頻繁に足利へ行っていました。

2007年4月 日、私は足利市内で食事をしようと思い、東武伊勢崎線足利市駅の前にあった焼肉店「マ ×」に顧客として入店しました。現在、私の妻となった崔華陽は、当時、同店の店員として働いていました。つまり、最初は、焼肉店の店員と顧客として知り合ったこととなります。私が何度か妻の焼肉店に通っているうちに、挨拶や世間話をするようになり、気がつくとも食事目的よりも彼女に会いに行く方が楽しみといった感情になっていました。足利での物件調査が終わってからも、1週間に1, 2回はお店に通っていました。以来、約8か月間は店員と顧客の関係でした。

4．当時の私の状況について

私は、もともと背の低い可愛らしい女性が好みでした。妻はまさにそのような女性だったのです。最初に目が合ったときから通じ合うものがあり、お互い、気さくに話ぐできました。私は妻に好意を抱きながらも、それまで、なかなか思いを伝えられずにいました。

それは、当時私が既に結婚していたからです。私の仕事は職種上深夜に及ぶことも多く、当時、仕事上外泊する機会も多かったことから、前妻との結婚生活に精神的なすれ違いを生じ、事実上婚姻関係が破綻している状態でした。性生活は何年にもわたり一度も無く、その頃、私の食事は全て外食でまかなっていました。お互いにいわゆる仮面夫婦の状態だったのです。

5．妻との交際開始

2007年12月×日、私はいつものように妻の勤務先店舗で食事をしました。店内で、私から妻に電話番号とメールアドレスを書いたメモを渡しました。その日、仕事を終った妻から電話があり、メールアドレスも交換しました。その次の日、私は、妻の仕事が終わってからドライブに誘いました。妻もこれに応じてくれ、個人的な交際が始まりました。私にとって妻が好みのタイプだったことは前述しました。妻から見た私は、銀縁メガネを掛け、いつもピシッとスーツを着こなす真面目なビジネスマンと映ったようで、容姿も気に入ってもらえたようです。普段の会話の中から、いつしか2人一緒にいることに、安心感を覚えるようになっていました。

それ以来、妻が焼肉店を辞める2008年1月 ×日まで、毎日メール交換をしたり電話を掛け合ったりしていました。私の仕事の水曜日定休であったことから、ほとんど毎週火曜日か水曜日に、レストランや公園にデートに誘っていました。

もともと、妻の日本語能力は私とのコミュニケーションに全く問題なく、お互いに好意を抱いていたことから、2人が急速に惹かれていくことに時間は掛かりませんでした。

妻は、焼き肉店「マ ×」を辞めた翌日の2008年1月××日から、妻の知人が借りている埼玉県春日部市のアパート（埼玉県春日部市緑町×-×番地 レオパレス× ××号室。以下「春日部のアパート」と書きます）に転居しました。その知人とは、家賃を半額ずつ支払うという約束だったそうです。ところがその知人は、同月28日に住み込みで仕事をするためアパートを出て行きました。結局、妻は、アパートの家賃を全額負担することになり、一人で暮らすことになりました。

6. 春日部で同居開始

当時、私の勤務先は埼玉県深谷市でしたが、2008年2月×日から私が春日部のアパートに週3泊程度泊るようになりました（前妻は私の外泊を気にしないようだったので、私もどこに行っていたか等の話はしませんでした）。

妻と一緒に暮らし始めてみると、掃除・洗濯、炊事をしっかりとこなし、私が仕事でどんなに遅くなっても寝ないで待っていて、毎晩、美味しい食事を作ってくれるところにも魅かれました。仕事で疲れているときは、肩や背中や頭部をマッサージして疲れを癒してくれました。妻の好意も十分感じられ、これが運命の女性なのだと確信しました。

日本人である前妻との関係が破綻したとき、私がどうして中国人女性を選んだのか。それは、一生一緒に居たいと確信したのが『崔華陽』という一つの女性であり、それがたまたま中国人であったというだけのことです。日本人女性を選んだほうが楽ではないかと言われそうですが、私にとって国籍は関係ありません。国際結婚の苦難というマイナス面を差し引いたとしても、他の多数の女性たちより崔華陽の魅力が勝ったからに他なりません。私のことを常に考えて、本気で尽くしてくれる女性は妻以外にいないのです。容姿の美しさ、性格、喧嘩してもすぐに仲直りできる相性の良さ、将来に渡る共同生活の見通しなど、総合的に判断して選んだ女性だと言えますが、一方で私の感情の高ぶりが妻との結婚を決意させたと言えます。

妻と出会う前の私は外食ばかりしていたのですが、妻と同居生活に入るといつも手作り料理を作ってくれました。品目を挙げていたらキリがないですが、マーボ豆腐・手作り餃子（中の具材から調達して作った餃子）・肉じゃが・味噌汁・ジャガイモ炒め・大根とイカの煮つけ・タケノコと鶏肉の炒め物・焼き魚・海鮮チヂミ・手作りキムチ・ハウレンソウの炒め物・玉ねぎと豚肉

の炒め物・韓国風海苔巻き・野菜やイカの天ぷら・豚の生姜焼き・韓国風冷麺などです。朝食は、フレンチトーストとトマトのサラダ、コーヒーがほとんどでした。毎朝、必ず、私の健康を気遣い「トマト」を加えてくれました。

このころまでに、互いに相手の呼び方が決まってきました。妻は私のことを『やま』と呼びます。言うまでもなく山田潤二の名字から取ったものです。私は妻のことを『かよう』と呼んでいます。これは崔華陽の下の名前をそのまま日本語読みしたものです。

2008年9月 日からは、春日部のアパートで妻と完全な同棲生活を送り始めました。春日部での生活費や家賃は、私が妻にお金を渡してやりくりをしていました。

妻との結婚を決意した私は妻に“自分は結婚しているが、前妻との婚姻関係は破綻している”と伝えました。そのとき、妻は大変ショックを受けたようでしたが、私は、将来必ず結婚することを約束し、納得してもらいました。妻のことを本気で幸せにすると書いた私の気持ちや行動が、真意として妻に伝わったのだと思います。また、私の食事の嗜好が、妻の作る料理に合致していて、美味しそうに食べる私の姿を見て、嬉しかったとも言っています。

以来、2009年3月×日まで春日部のアパートで同居していました。

7. 交際開始から春日部のころの出来事

妻との交際開始以来、東京ディズニーランド・池袋ナンジャタウン・むさしの村・上野動物園など多くの遊園地に行きました。また毎週水曜日には、パスタとケーキがとても美味しいお店でいつもお客様がたくさんいる「ベルパエーゼ春日部店」に良く行っていました。妻は海鮮パスタとケーキは必ずモンブラン、私は和風パスタを大体頼んでいました。そのお店はケーキについては入口近くのショーケースから選ぶ形式だったので、初めて行ったときは2種類のモンブランがあることに気付かず、妻が意図していない方のモンブランが来てしまい、もう1つの本命のモンブランを追加で頼んだことがありました。私はパスタ屋さんのケーキということで、あまり期待していなかったのですが、さすがお店で手作りしていて有名なだけあり、とても美味しかったのを覚えています。

2008年12月 ×日には、妻と上野動物園にでかけ、象や猿を見てきました。

このとき撮影したのが**[写真1, 2]**です。

ちょうどその日は上野公園で大道芸人がパフォーマンスをやっていて、面白そうだったので見てきました。バランスを取るのが難しい箱に立って、ジ

ヤグリングをしたり逆立ちをしたりして結構楽しかったのを覚えています。芸が終わった後に、大道芸人が言ったことを今でも良く覚えています。

大道芸人：「今どき、映画1本見るにしたって1000円はしますよね！」
「芸をご覧になって頂き満足して頂けたなら、そのあたりを考えておひねりを頂けるとありがたいです！」

なかなか商売上手なことを言うなと妻と私は思い、100円を帽子に入れようとしていたのですが、結局1000円を入れてきました。その後、上野駅ビルの中にあるスターバックスコーヒーに立ち寄り、帰りの電車ではその大道芸人の話題で楽しく帰ってきました。

このときスターバックスコーヒー店内で撮影したのが【写真3】です。

8. 熊谷へ転居

当時、私の勤務先は埼玉県深谷市で、春日部のアパートからは遠かったので転居することにしました。妻と一緒に不動産屋に出向いて賃貸物件を案内してもらい、職場に近い埼玉県熊谷市に私名義のアパート（埼玉県熊谷市別府×× アクセス×× 号室。以下「熊谷のアパート」と書きます）を借りました。2009年3月×日に私と妻で熊谷のアパートに転居しました。ここの貸室賃貸借契約書には、同居予定者（婚約者）として妻の名も載っていますので、写しを提出します。なお、私の住民票に前住所として「アクセス×× 号室」が載っていて「未届」とあるのは、現実に熊谷のアパートに居住しながら、群馬県伊勢崎市に転出届を出して熊谷市に転入届を提出しなかったため、このような形が残ったのです。なお、妻は、春日部にも熊谷にも外国人登録をしていませんでした。熊谷のアパートでの同居生活は、妻が熊谷警察署に連行される2009年5月××日まで続きました。

9. 熊谷のころの出来事(1)

熊谷へ転居して間もなく2009年3月×日の妻の誕生日には、2人で春日部市のロビンソン百貨店に出掛け「ハートのネックレス」をプレゼントしました。妻は、一日中そのネックレスを身につけていてくれます。値段は30,000円程のネックレスなのですが一緒に選んで購入したものです。2人にとって、将来の結婚を約束した、その記念品だと思っています。妻は、後日、入管に収容されているときも、帰国してからもずっと身につけています。帰国後に撮影した写真の中でこのネックレスが写っているのは、例えば【写真47,54】です。

10. 熊谷のころの出来事(2)

2009年4月8日には「さくら名所100選」にも選定されている熊谷桜堤へお花見に行ってきました。土手沿いに約2kmにもおよぶ満開のソメイヨシノを満喫してきました。

露天商もたくさん出店していました。この日は暑かったのでアイスコーヒーを露天で購入しました。露天の暖簾に「ラサール・コーヒー」と書いてあり、本家の「ドトール・コーヒー」を真似ていたのが面白く感じられました。露天でコーヒーを販売していたお兄さんが、髪を三つ編みにして暑いのにマスクもしていたので妻と2人で爆笑していたのを覚えています。そのお兄さんは、となりの露天の「ふる一つあめ」も担当していて結構忙しそうでした。

このとき撮影したのが**[写真4, 5, 6]**です。

11. 熊谷のころの出来事(3)

2009年4月×日には埼玉県東松山市近郊の国営武蔵丘陵森林公園に行ってきた。この日も晴天で暑かったのですが、森林に囲まれる中、芝生に座りこみ森林浴を楽しみました。身体中から新鮮な空気を吸収するような心地よい感覚だったのを覚えています。レンタサイクルがあったので2台借りて森林公園のコースをゆっくりと回りました。コースの途中で、時期はちょっと早かったのですが水遊び場に足元が浸かる位の水が張ってあったので、2人で入ってみました。程なく管理人のおじさんが来て、「まだ入っちゃダメだよ。」と注意されたので、水遊び場から出ました。水遊びなんて何年ぶりだろうと思い、結構楽しかったのを覚えています。

このとき撮影したのが**[写真7, 8, 9]**です。

12. 妻の逮捕と強制退去

2009年5月×日午前8時、熊谷のアパートで妻はいつものように私の朝食を作り、私はシャワーを浴びているところでした。突然、熊谷警察署の警察官3名がアパートに来られ、妻にパスポートを見せるよう指示されました。妻は作っているフレンチトーストの火を止めて怯えるように洗面室に入ってきました。私はすぐにシャワーから出て、警察の方と話をし30分だけ時間を欲しいと告げ、部屋で妻に話をし始めました。

私は妻に愛している旨を再度告げて、これからどんな困難が起ころうとも必ず妻と一緒にすることを伝えました。妻はこれからの私のことを不安に思い、今にも泣きだしそうでした。そんな状況においても、私が一人になることを心配してくれていました。

私は妻の連行に同行させてもらい、警察車両の中で怯えている妻の手をずっと握り締めていました。妻は熊谷警察署で取り調べを受けて、入管法違反（不法残留）で逮捕されました。私は熊谷警察署の方に頼んで、妻に必要な着替え等の衣類の他、現金で30万円を妻に差し入れました。妻はその日の午後に蕨警察署へ移送されて同署留置場に一晚泊まり、翌5月20日に東京入国管理局に移送されました。

私は、熊谷警察署と蕨警察署に何度も連絡をとり、何時に入管に移送されるのか問い合わせをしました。5月×日午前7時50分に私は東京入管に到着し、番号札4番を受け取りました。入管職員の方に、妻はまだ到着していないことを告げられ、再度午後2時50分に番号札238番を受け取り、妻と面会をしようと思いました。入管職員の方が調べてくれたのですが、まだ妻は移送されていないとのことでしたので、その日の面会はできませんでした。翌日の5月×日は午前8時30分に東京入管に到着し、番号札3番を受け取りました。午前9時40分、7号室にて10分間の面談をしてきました。無機質な2畳程の部屋で、妻と私との間は厚いアクリルボードで遮られている空間でした。妻は涙を流していましたが、私は生理用品や着替え等を差し入れ、少しでも元気になって欲しいと勇気づけていました。

翌日の5月22日午後6時36分に、東京入管のご担当者から私の携帯電話に連絡が入り妻との関係を聞かれましたので、はっきりと婚約者である旨を伝えました。そのときは私が電話に長く対応できない状況だったので、改めて5月××日午後7時に連絡を頂戴するお約束をいただきました。同時刻に予定どおりご担当者からお電話頂きまして、私から、再度、はっきりと妻と結婚する意思のあることとお話しました。

その後、妻は茨城県牛久市の東日本入国管理センターへ移送となりました。私は時間の許す限り、面会に出向き差し入れを行い収容されている妻を元気づけようと試みました。妻が品川及び牛久の入管施設に収容されている間は、私は合計7回ほど面会に行き、差し入れを行うなどして妻の精神面をサポートすることに徹しました。

その後、2009年6月×日に妻は強制退去処分を受けて帰国しました。牛久の東日本入国管理センター企画管理執行部のご担当者には、格別の御配慮を頂き、妻の帰国便と同じ便で私が中国へ行くことができましたことを、ここに深くお礼申し上げます。

帰国の飛行機の中では、最初、座席が別々でした。妻を捜すと一番後部の座席に妻を見つけました。走り出したくなる気持ちを抑えて妻の所へ行き、手を握り締めました。私は、自分の隣の座席の方をお願いして妻と席を代わ

っていただき、大連までのフライトを妻と一緒に過ごすことができました。

13. 妻の不法滞在について

妻が熊谷警察署に連行されたときには、私もアパートで同居をしていました。妻はもとより、同居していた日本人である私も、妻の不法滞在を見逃してした訳ですから同罪であると考えています。今となって、日本の入国管理制度の重大さや厳しさを十分理解する必要があったと反省しております。妻も、2度と同じ過ちを犯さないと誓っております。妻から反省の弁を述べた書類が届いていますので、これを提出します。

私も、妻が次に来日できた際には、ビザの手續について十分に注意する覚悟です。

14. 中国初渡航

妻の逮捕以来、私は一刻も早く妻と一緒に居たかったので、牛久の入管職員の方から妻の帰国便を教えていただき、2009年6月×日、妻と同じ便で中国へ行くことができました。これが私の中国初渡航になりました。

渡航ルートとして、成田から大連、そして大連から延吉へのフライト予定でした。

当日の天候があまり良くなかったので、心配ではあったのですが、大連から延吉への飛行途中で、急きょ機内アナウンスが入り、目的地の延吉へは天候が悪く、行けないので、瀋陽に着陸してしばらく機内で天候が回復するまで待つ旨の連絡が伝えられました。

瀋陽空港に着陸して、機内で2時間程待っていたのですが、結局その日のフライトはキャンセルとなりました。航空会社の手配で瀋陽のホテルを用意してくれたのですが、翌日はホテル前に午前5時集合だったので、ゆっくりと休むこともできませんでした。翌日は天候も良く、無事に延吉まで飛行することができました。

延吉空港に着いて到着ロビーに出ると、妻の父・崔×、母・呂×、弟・崔×が出迎えに来ていました。

妻の母親は、妻と約5年半ぶりに再会し、余程心配していたのか、その場で妻を抱きしめて泣いていました。妻の母の手には花束があり、それを私に差し出しました。私は、その花束を丁寧に受け取り、お詫びの態度を示すべく、深く頭をゆっくりと下げました。正直なところ、私は妻の父親から殴られても仕方ないくらいの覚悟はできていました。妻の父親からしてみれば、理由はどうであれ、私が付いていたにもかかわらず、妻に大変な思いをさせ

てしまったことには変わりがないからです。それにも関わらず、このような私に対して、好意的に接してくれたことを大変ありがたく感じました。もし、自分が一人の娘を持つ父親だとしたら、果たして同じ態度ができるだろうかと思いました。

その後、妻の両親が用意してくれたタクシーで空港から約40分の図門市の妻の実家まで帰りました。

15. 妻の実家にて

妻の実家での初日は、妻の母親がたくさんの手料理を用意してくれ、妻の家族や親族と一緒に食事をしました。振舞ってくれた料理は、豚肉とタケノコの炒め物・手作り餃子・餃子のスープ・手作りキムチ・小魚の甘露煮・米飯などでした。親族が揃って多人数ではありましたが、料理の量もたくさんありました。もともと私は中華料理が好きでしたし、義母の手料理についても美味しく頂戴しました。特に餃子は日本でもかなり食べますが、妻の実家で出された餃子の味は格別でした。初めて訪中した私を、そういった手料理で歓迎してくれたことについて、恐縮した気持ち（妻に辛い思いをさせたこと）がありましたが、親族多数で歓迎してくれて大変ありがたく感じました。

妻の実家は、思っていたより綺麗でした。7階建てマンションの3階部分で、内装は白のクロスで統一されています。LDKは25畳くらいあると思われ、かなり広く感じられました。ほかに約8畳の部屋が2つあります。トイレとシャワーが一緒で、洗濯機も同じ場所にあり、水まわりの使い勝手が悪いのが目に付いたくらいです。妻も、日本に居た時には、トイレとお風呂が別にあるのが日本の良いところの一つだと言っていました。水回りの使い勝手以外は、日本のマンション住まいとあまり変わらない印象です。テレビも大画面の薄型テレビが設置してありました。周囲には、とても住めないような粗末な家も多くありました。妻の実家に関しては、もっと質素な暮らしを想像していたのですが、現地ではそこそこの暮らし向きの中流家庭のようでした。このとき撮影したのが**[写真11, 12]**です。

翌日からは、延吉の市街地や、夜間にライトアップされた「水上公園」に出掛けました**[写真13, 14]**。

妻の実家は北朝鮮との国境近くにあります。近くの「図門江」と呼ばれる広場には、連日たくさんの観光客や地元の人で賑わいます。このとき撮影したのが**[写真15, 16]**です。

6月×日には、再び市街地に出て、中国銀行前で記念撮影したこともあ

ります【写真 17】。

妻との時間もあっという間に過ぎ去り、2009年7月 日に私は日本に帰国しました。大連から成田へのフライトだったので、前日は大連空港近くの「大連国際機場賓館」に妻と泊り見送ってもらいました。

このときホテル及びホテルの前で撮影したのが【写真 18 , 19】です。

16 . 中国渡航(2)

2 回目の訪中は、瀋陽で妻と過ごす計画となりました。妻が再度来日できるまではなるべく多く妻に会いに行きたいという気持ちがあるものですから、航空の便の良い瀋陽を選んだのです。離れているときは、お互いにパソコンのウィンドウズ・ライブ・メッセンジャー機能でテレビ電話を、毎朝、毎晩していて、国際電話も毎日3～5回程度しているのですが、やはり実際に会うことには代えられない気持ちがお互いに強いのです。

2009年7月××日、瀋陽空港で妻と待ち合わせました。空港を降りると妻が既に私を待っていてくれました。このときの滞在は3日間だったので、2泊を「インターコンチネンタルホテル瀋陽」で予約しました。空港到着後、早速、タクシーでホテルまで行きました。妻は、実家から列車で14時間かけて瀋陽まで来て、私も飛行機に乗ってきて疲れていたもので、その日はすぐに休みました。

翌日、瀋陽の町へ出かけ、しゃぶしゃぶを食べにお店に入りました。そこのお肉は大変美味しくて、結局、次の日もそのお店へ行くことになりました。2回目に行った時は、お店の店員さんが得意客だと思ってくれたらしく、サービスが良く感じられました。

宿泊したホテルも4つ星ホテルだけあって、サービスは上々でした。朝は、バイキング形式の朝食付きだったので、妻と一緒に食べに行きました。ところが食べている最中に、ホテルの人が妻に話しかけているので、何かと尋ねたら、朝食は1人分しか料金に入っていないと、とのことでした。その場で、妻の分の料金を支払い、バイキングを食べました。このときの渡航記念に、ホテルの中とホテルの外で写真を撮りました【写真 20 , 21】。

この3日間はあっという間に過ぎ、妻には瀋陽空港まで見送りに来てもらいました。フライトまで時間があったので、空港内の喫茶店で飲み物をオーダーして、時間までを過ごしました 【写真 22】。

その後、妻に「次に来る時は結婚するときだね」と伝えると、妻は照れながらも頷いて、私に「ありがとう」と答えてくれました。私はその場で別れるのが辛かったのですが日本へ帰国しました。

なお、帰国後の2009年9月 日に、私と前妻との間で、前妻の子・山田 ×の親権者を母と指定して調停離婚が成立しました。

17. 妻へのプロポーズ

私の性格が真面目に過ぎるのかも知れませんが、やっと前妻との離婚が成立したので、それを機に正式に結婚を申し込むことにしました。離婚成立4日後の2009年9月 日、自宅から妻にインターネットのテレビ電話で話しているときに、正式にプロポーズしました。私から妻に「結婚しよう」と伝えたところ、妻は「はい、分かりました。よろしくおねがいます。」と快諾してくれました。

そこで、次回の中国渡航において法律上の婚姻を成立させるべく、中国式結婚のための書類準備に入りました。

18. 中国渡航(3)

3回目の訪中は、結婚登記を主たる目的とした渡航になり、2009年10月×日から10月× 日までの滞在でした。妻の実家の吉林省では、国際結婚手続は長春市で行うこととなっていましたので、このときは長春市の「マックスコートホテル」を予約しました。妻も長春まで私を出迎えていましたので、その日は翌日の結婚登記に備えてすぐに休みました。

このときホテルで撮影したのが**[写真 23, 24]**です。

翌日10月× 日には、あらかじめ日本で準備した書類を持って長春市にある「吉林省涉外婚姻服務中心」と「吉林省民政庁婚姻登記処」へ出向き、結婚登記を完了させることができました。このときは、壇上へ上がり結婚について宣誓を行うという儀式がありました。緊張しながらも、どうにか「宣誓」の儀式を通過することができ、2人でホッとしたのを覚えています。このとき撮影したのが**[写真 25]**です。

翌日からは観光に時間を割きました。10月 日は、「偽満皇宮博物院」へ行って来ました。ここは、映画ラストエンペラーの舞台にもなった場所とのことでした。建造物は改修復元されていて、なかなか豪華な建物がたくさんありました。「東御花園」というすばらしい庭園があったのですが、この庭園は1938年に造られ、日本の園芸家佐藤昇氏が設計を手掛けたそうです。「同徳殿」と呼ばれる建物は、中日両国の建築様式をもった建物で、1938年に落成したそうです。この同徳殿の由来は、清王朝最後の皇帝「溥儀」が、「日満一徳一心」に基づいて命名されたそうです。

このとき「同徳殿」の前で撮影したのが**[写真 26]**です。

その後、「東北淪陥史陳列館」を見学しました **[写真 27]**。

長春での結婚登記も無事に終えて、バスで妻の実家まで行くこととなりました。延吉までバスで5時間もかかるちょっとした長旅の様でした。途中の停留所での休憩時間はバスの外に出て、山に囲まれた自然の中、深呼吸をして身体を伸ばしリフレッシュしました**[写真 28]**。

延吉では、妻の母親と親族が出迎えて待っていてくれました。その日の夜は、延吉市街のしゃぶしゃぶ店にて親族らに食事をご馳走になりました。私は羊肉が苦手だと妻に伝え、“牛しゃぶ”と“豚しゃぶ”を頼んでもらいました。しゃぶしゃぶ店を出て撮影したのが**[写真 29]**です。

10月×日には、延吉市人民路××号所在の写真館「巴黎婚紗撮影」にて結婚記念の写真を撮影しました。着替えから撮影まで4時間にも及び、何回も衣装を取り替えながらの撮影でした。このとき撮影した写真の一部が**[写真 30, 31, 32]**です。

このときの渡航は、結婚登記のほか、観光、写真撮影などで忙しい訪中となりました。

私は、帰国して間もなく10月×日付けで、伊勢崎市役所に日本側婚姻届を提出しました。

19. 妻の妊娠

2009年11月 日の15:00頃、工作中に妻からの私の携帯に電話がありました。妻が妊娠したというのです。そのとき、私はお客様と接客中でしたので、長い話はできませんでした。妊娠と聞いて、びっくりしましたが平静を装って接客に戻りました。夕方、接客が終わり、すぐに妻に電話を掛け直し、『おめでとう』と伝えました。私は、嬉しさを抑えきれず、会社の同僚や上司に妻が妊娠したことを話しました。その日は上司が早めに帰宅させてくれたので、テレビ電話でもう一度妻と話をしました。妻にとって最初の妊娠です。病院へ妊娠の検査に行って、妊娠だと妻が告げられたときの感激など、色々話をしました。この日以降も妻は『小さい「やま」ができた』と妊娠中の毎日言って喜んでいました。妊娠初期から男の子が生まれることを予想していたようでした。上述のように「やま」とは妻がつけた私(山田)の愛称です。

20. 妻への結婚指輪

私と妻で相談した結果、2010年1月に中国で結婚式を挙げるにしました。私は妻に「結婚指輪」をプレゼントしようと思い、都内池袋のダイヤモンド

ドジュエリー販売会社「BRILLIANCE+」から指輪を購入することにしました。あらかじめ同社から“リングゲージ”を譲ってもらい、それを妻の元へ送って指のサイズを測り、2009年12月 日に夫婦ペアのプラチナオーバルリングを発注しました。値段はペアで94,900円でした。指輪は私の手元に12月××日に納品されましたので、翌年1月の結婚式に妻にプレゼントすることができました。結婚指輪の御買い上げ明細書コピーを提出します。

なお、後日になりますが、このときの結婚指輪を嵌めている妻と私を撮影したのが【写真45】です。

21. 中国渡航(4)

4回目の訪中は、結婚式を主たる目的とした渡航になり、2010年1月 日から1月××日までの滞在でした。

2010年1月 ×日、私と妻は吉林省図門市の「阿里朗酒家」にて、結婚式を挙げました。この地の結婚式の風習を少し書きますと、まず、結婚式の前夜、私は延吉市にある妻の親せきの家に泊ることになりました。結婚式当日は、私が早朝から妻の実家へ妻を迎えに行くというシチュエーションで始まりました。

当日の朝、私は、親せきの家で多くの人に見送られ、「花や風船で飾り彩られた車」に乗り込み、前後に3台ずつ援護車両を従えて、延吉市内を疾走し、図門市の妻の実家まで向かいました。親せきの家のある延吉から、妻の実家のある図門市までは、高速道路で40分位かかるので、妻の実家に到着したときは、ほとんど車の風船は取れてしまっていました。中国では、当たり前な結婚儀式なのかも知れませんが、車中で私は、風船車両に乗っていることが、少し恥ずかしいような気がしてしまいました。

恥ずかしながらも、妻の実家へ到着し、妻の部屋に私が妻を迎えに行き、結婚式場へ一緒に向かうという場面で、また儀式が行われることになりました。妻の実家の玄関から、私が妻と一緒に出ようとする、執拗に親族や知人らが何人も邪魔をします。そこで予めたくさん用意しておいた、お年玉袋のような「現金袋」を、邪魔する親族や知人にいちいち渡して、通行許可をもらうのです。それで、やっと外の車まで妻を連れて行くことに成功しました。これは、私が妻をもらっていくのだから、「タダでは通さないぞ！」という、中国ならではの結婚式の慣習と知りました。

朝から始まっている結婚の儀式も、午後になり、ようやく結婚式場の「阿里朗酒家」に到着となりました。到着するとすぐに、私と妻を祝福した爆竹が激しく鳴り響きました。

結婚式では、各テーブルを回って挨拶をしたり、音楽に合わせて踊りがあったり、とても賑やかなものとなりました。式では、子供に恵まれるよう私が「ゆでたまご」を一口で食べる演出があったり、妻の腕と私の腕を交差させて自分の手に持ったワインを飲む儀式があったりしました。私は、そのワインを飲む儀式で、てっきり妻の手に持ったワインを飲むものだと思っていたものですから、私は、妻の持ったグラスに口をとがらせ近づかせてしまい、会場から笑いの渦が起こってしまいました。

その後、どうにか結婚式も無事フィナーレを迎えることができ、ワイン儀式での失敗も良い思い出となりました。

結婚式で撮影したのが **[写真 35,36,37,38]** です。

22. 中国渡航(5)

5回目の訪中は、2010年3月 日から3月× 日までの滞在でした。

このときは、妊娠している妻の安否確認を兼ねての訪問でした。妻の出産予定が7月ということで、お腹も大きくなってきたことから、外出は控え目にして、なるべく妻の負担を減らすようにしていました。

妻は働いておらず、生活費は私から毎回訪中の際に10万円ずつ手渡ししているのですが、このときは7月の出産も控えていることもあり、15万円を渡してきました。

私は、男の子か女の子かどちらが生まれてくるのか知りたかったので、妻に聞いたのですが、中国では生まれてくる子供の性別は、絶対に教えてくれないのだそうです。中国の一人っ子政策に起因するものだそうです。

この渡航の際、妻の実家で撮影したのが **[写真 39, 40]** です。

23. 子供の出生

2010年7月 ×日午前6時27分、吉林省図門市の市民病院『図門市人民医院』にて、妻は無事に男の子を出産しました。予定日の7月××日より少し早い出産だったので気になったのですが、体重も3キロ、身長も50センチの標準的な体位ということなので安心しました。私は妻の出産に立ち会うことができませんでしたが、中国ではこのころ「毒ミルク」騒ぎがあり、日本から前もって、粉ミルク・哺乳瓶や子供の着替え等を妻の元へ送っておきました。これで次回の訪中までの粉ミルクは足りるだろうと思って安心できました。妻の入院は1週間ということで、その間はパソコンのテレビ電話ができず、お互いに寂しい思いもしました。しかし、携帯電話を使うことはできましたので、子供のことについて色々話をしました。子供の容姿につ

いては、父親の私にそっくりとのことでした。後日、パソコンのテレビ電話で子供の顔を見ることができ、そうしたら、やはり私の顔に似ている、と我ながら感じたものです。子供の名前は、「×(はやと)」と名付けました。時代や世界を颯爽と駆け巡ってもらいたいという気持ちと、良い画数を調べて、妻の了解を得たうえで命名しました。

24. 中国渡航(6)

その次の訪中は、生まれた子供に会いに行くということもあり、2010年8月 日から2010年8月××日まで、約2週間の滞在となりました。大変ありがたいことに、私の会社の上司も同僚も、私と妻のことを理解してくれています。私が訪中している間の引き継ぎなどは、すべて同僚がフォローしてくれました。私の親族や会社の同僚・上司の方々の協力があって、このような訪中が可能となっていることに感謝の思いで一杯です。

妻の実家で眠っている息子を初めて実際に見たとき、本当に私の顔に似ているなと思いました。生後3週間ほどでしたが、髪の毛も生えていて、手を動かしたり、泣いたりして赤ん坊が可愛く思えました。妻に、赤ん坊を抱っこしてみたら？と言われたのですが、最初は上手く抱っこできるかどうか、おっかなびっくりでした。息子は、ミルクを飲みたかったり、おむつが汚れていたりすると、大きい声で泣きます。妻の実家では、妻の両親や弟までもが、私の息子の面倒を見ていてくれています。ミルクをあげたり、抱っこしたり、身体を洗ったりと色々大変です。

主に、中国の両親に息子の面倒を見てもらっている様子が【写真41,42,43】です。

また、妻の父が、初孫にあたる私の息子のためにネックレスを購入してくれました。函門市の宝飾店で2000元くらいする高価なものでした。そのネックレスをしている息子の姿が【写真44】です。

私も赤ん坊を抱っこしてみました。きちんと抱っこしてあげないとすぐに大声で泣きます。初めのうちは慣れないので、すぐに泣かれてしまったのですが、やがて抱っこのコツを覚えると、抱っこをしながらミルクを与えることもできるようになりました。これで“お父さんも少しは役に立ったのかな”と思いました。その後、息子は私の腕の中で眠りにつきました。私も親として、いつでもこうやって息子をあやしてやりたいものだと思っただけです。もっとも、息子は母親に抱かれたほうがリラックスして眠りに着くようで、母子ともに早く日本に来て欲しいものだと思っただけです。

このときの渡航で、私と妻と息子で撮影したのが【写真45,46,47,48,49】

です。そして私たち親子3人のほかに中国の両親や弟も入って撮影したのが【写真50】です。

このときの滞在は、時間的余裕があったので、毎日、妻と2人で「図門江」まで散歩に出かけていました。そこは中国と北朝鮮の国境近くにある公園で、観光地の1つとしてたくさんの人々で賑わっていました。帰りは人力車に乗って市街地へ買い物に出かけました。図門江と帰路の人力車内で撮影したのが【写真51,52,53,54】です。

8月14日には、私と妻の結婚式に出席したださった妻の母親の友人の方達にご挨拶に伺いました。息子は妻の父親と弟に見てもらいました。義母の友人の中に小さい飲食店を営んでいる人がいて、そのお宅の庭でたくさんの料理を囲んで友人の方達と一緒に小宴を楽しみました。私と妻は、集まってくださった方々全員に、結婚式の際の謝辞を述べて回りました。このとき撮影したのが【写真55】です。

今回は、15日間というスケジュールなので比較的ゆっくりと滞在することができましたが、一方で妻子と一緒にいる生活に慣れたために、妻や息子と別れなければならないのは、かなり辛い思いをしました。

妻には不法滞在の前歴があり、ペナルティーを課されるのは理解していません。また、妻の不法滞在期間を延ばしてしまったのは、他ならぬ私です。そのことから、妻の不法滞在の責任は私にも当然あるものと考えております。今回の件で、妻が反省しているのは当然のこと、私自身も猛省を誓っているところであります。ですが、何とか1日でも早く、妻と子供と私の3人で暮らしたいと妻も私も思っています。今回の渡航で自分の息子を目の当たりにして、改めてそのように思った次第です。

帰国後、私は速やかに息子を日本の戸籍に入籍する手続を伊勢崎市役所にて済ませました。

25. 日本の親族について

私には父母と妹2人がいます。全員、私の結婚と息子の誕生を知っています。結婚する前には、私から母親に、妻が撮影されているフォトブックを見せ、妻を写真で紹介しました。母がフォトブックで妻を見ている場面を撮影したのが【写真10】です。

尚、今回の申請をするにつき、母が嘆願書を書いてくれましたので、これを提出します。

26. 妻の学歴と日本語力について

妻は質問書第4ページ記載のとおり、中国での6年間の日本語学習のほか、就学による在留歴があり、その後の不法滞在期間を含めて計5年以上の滞在歴があります。日本で生活するための日本語力は全く問題ないものと思われます。×ランゲージスクールの学生証の写しを提出します。

27. 国際電話等の利用について

毎朝7時になると、妻から私にモーニングコールが掛ってきます。それが毎日の妻との会話の始まりです。そして朝の出勤前に、パソコンのメッセージを使ったテレビ電話をします【写真 33,34】。そして私が会社に到着したら、妻に国際電話を掛けます。お昼休みにも妻に電話を入れます。その日の仕事の都合で、午後3時から5時くらいの間にも、私から妻に電話を掛けます。仕事が終わって退社間際にも妻に電話します。家に帰り、パソコンのテレビ電話を起動した段階で、「今からテレビ電話をつけるよ」と妻に電話を掛けます。それから、パソコンでのテレビ電話を行います。毎日、最低でも上記の回数は連絡を取ります。一日足りとも、妻に連絡をしなかったことはありません。

以上のように頻繁に国際電話を利用していますので、通話明細を提出します。また国際電話のプリペイドカードも使用していますので、その写しも提出します。

28. 妻の生活費について

前述しましたが、私は中国へ渡航するたびに、妻に現金で10万円を渡しています。子供が生まれる前には15万円を渡してきました。その他、子供の粉ミルクや、ベビーパウダー、体温計、哺乳瓶等は、私が日本で購入し、妻の実家に送っています。そういった購入品の領収書(一部)と国際郵便(EMS)の控えを提出します。

29. 結語

妻は、日本語能力も高く、日本での滞在歴から日本の生活習慣を十分に身に付けています。また、私と同居して共に暮らしていましたから、夫婦としての呼吸もぴったり合っています。妻子の来日後は、私の所有建物にて、親子3人で暮らしてゆく予定ですので、安定した生活を送ることができます。妻子来日後の生活には一切不安がありません。

妻には、2009年6月の退去強制歴があり、なかなか日本への入国は難しいと聞いています。しかし、私は、どんな困難があっても、妻と息子と私が

親子3人揃って一緒に日本で暮らす決意に変わりはありません。

今後、妻が二度と入管法その他の日本の法令を破ることの無いよう厳格に監督致します。

以上の次第ですので、何らかの特例をもって妻の入国をご許可くださるよう嘆願するものです。

(以上です)